今昔物語 第67話

考古資料精選⑨
素文鏡

直径約2.1センチ、重さ2.7グラム、中央に約2ミリの孔を開けた粗雑な紐（鏡の背につけるつまみ）を持つ青銅製の鏡で、背面に文様がまったく施されないことから、このように呼ばれています。

中垣内遺跡で古墳時代前期（約1600年前）の集落跡を調査した際に、竪穴住居跡近くの土坑（土器などの遺物を埋納したり廃棄したりするために掘られた穴）から出土しました。

古墳時代の鏡は実用品ではなく、信仰の対象として、あるいは祭器として祭祀の場で用いられていたことが明らかにされています。三角縁神獣鏡などにみられるように、古墳などの墳墓の副葬品として出土することが多いのですが、特に素文鏡などの小型鏡は兵庫県別所遺跡で井戸から9点も出土するなど、水と関係のある遺構から出土する例が多く、水辺の祭祀と深いかかわりをもつものと考えられています。

当時、中垣内の古墳時代集落は西方に大きく広がっていた河内湖のほとりに営まれていました。おそらくこの鏡を使い、水辺でさまざまな祭祀を行っていたのでしょう。

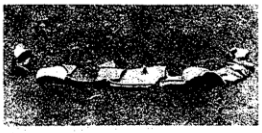
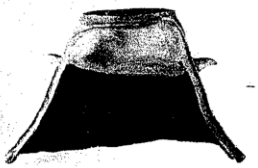
中垣内遺跡から出土した素文鏡

今昔物語 第68話

考古資料精選⑩
竈

メノコ遺跡（野崎3丁目所在）から出土しました。底部径約56・0センチ、高さ約36・6センチ、掛け口（土器を置くところ）は直径約26・8センチで、中央両側には角状の取っ手が下向きに付けられています。出土状況からおよそ古墳時代後期（約1400年前）から飛鳥時代（約1300年前）のものと思われます。

当初、竈は竪穴住居に直接造られていましたが、古墳時代中期に朝鮮半島から伝来し普及するようになりました。持ち運びが出来ることから特に移動式竈と呼ばれています。

この竈の特徴的な点はその出土した状況で、写真のように東西にほぼ一列の態で並べられていたことです。何らかの意図を持っていたことは明らかであり、おそらく祭祀的行為における結果であると考えられます。

科学の発達した現代人においても、火がなければ生活を営むことは出来ません。火に対して畏敬の念を抱いていた古代の人々はそのことをより謙虚に受け止め、祭祀という行為の中で感謝の気持ちを表していたのでしょうか。